



TITLE:

<研究論文>心理学の課題としての
無形文化財保護：世代間の関係性とい
う時間の枠組みによる発達心理
学の新たな可能性

AUTHOR(S):

竹内, 一真

CITATION:

竹内, 一真. <研究論文>心理学の課題としての無形文化財保護：世代間の関係性という時間の枠組みによる発達心理学の新たな可能性. 教育方法の探究 2009, 12: 33-40

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190356>

RIGHT:

心理学の課題としての無形文化財保護

——世代間の関係性という時間の枠組みによる発達心理学の新たな可能性——

竹内 一真

1. 無形文化財保護における「生成の保障」という課題

(1) 無形文化財保護が問題になる理由

近年、芸能の継承が大きな社会的な問題となっているテーマに、ユネスコによる「無形文化遺産の保護に関する条約」(以下、無形文化遺産保護条約)が挙げられよう。ユネスコでは2003年に無形文化遺産の保護に関する条約が採択され、無形文化遺産の保護に努めている。この条約の制定には2001年に採択された「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」が大きく影響している。「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」では文化の多様性を生物における種の多様性と同じように重要であることを指摘している。具体的には生物における種の多様性が自然にとって不可欠であるのと同じように、文化の多様性は、その交流・革新・創造性の源として、「人類共通の遺産」であり、欠くことのできないものであると述べている。このような認識の下、ユネスコは文化の多様性を保護するべく、その一つの施策として無形文化遺産保護を制定したのである。

無形文化遺産保護条約では形のない文化遺産、つまり、社会や集団によって文化遺産と認められるような慣習や芸能、知識及び技術などが、世代から世代へ人を介して伝承され、社会的・文化的な影響を受けながら生成的に変容していくものとして捉えられている。従って、無形文化遺産保護条約においては建築物や絵画、彫刻などの有形な文化遺産の保護とは異なり、世代から世代へと伝わる際に社会や文化の影響を受けて変化していくというのが保護の前提として置かれているのである。

吉田は無形文化遺産に対して「身体化された知識の総体」とみなし、世代を超えた継続性を孕みつつも、新たに生成するのであって、このような文化遺産に対

しては生成的な側面を「保障」することが肝要であると述べている(吉田、2005)。また、植木は生成を前提とする文化遺産保護において、保護の基本は技術・技能を保持し体現する人をいかに確保するかということにかかっており、後継者の育成が不可欠であると主張している(植木、2005)。つまり、無形文化遺産の保護にあたっては、後継者の育成が保護の基本になるのであって、その際に、生成的な側面を保障することが重要であるというのが保護政策の一つの方向性となっているのである。

(2) 本稿の問題と目的

このような主張が述べられている一方で、無形文化遺産の生成的な側面を取り入れた形での保護には困難さも指摘されている。

齊藤は、もし無形文化遺産において「生成」という側面を前提に置くならば、文化遺産の保護はどうあるべきで、有効な支援策は何かというのは非常に大きな問題であると指摘している(齊藤、2004)。また、俵木は無形文化遺産の生成という側面の重要性は保護行政において理解されているが、実際、無形文化遺産における「生成」とはいかなるもので、それを「保障」するためにはどのような働きかけができるのか、あるいはどのような支援が期待されているのかという点に対して答える準備は十分にできてはいないのではないか、と疑問を呈している(俵木、2006)このように無形文化遺産保護においては「生成」という側面の重要性は理解されているが、一方で、「生成」をどのように評価すればよいのか、そして、どのような評価に基づいて支援をしていけばよいのかという点に関しては十分に議論されていないのである。

そもそも、伝承者と学習者は身体的に全く同じとい

うことはありえず、従って、伝承者と学習者が全く同じ動きをするということも原理的にありえない。しかし、一方で、長い時間をかけて伝わってきた芸能の伝承において、もし学習者の創り出すあらゆる動きを「生成」として認めるならば、伝承者の指導とは全く別な芸へと変容してゆく可能性は大いにあり、そのような事態になれば世代を超えた連続性を維持するのは難しい。世代を超えた連続性を維持できないということになってしまえば、無形文化遺産の保護はその存在自体が極めて危ういものになってしまうのであり、それ故、世代を超えた連続性を保障するために、伝承者は先行世代から受け継いだ伝承に関して、その生成を後続世代にどのように保障しているのか、という世代間の関係の中での伝承の生成に関する問題が無形文化遺産保護において極めて根本的な主題として浮上してくる。

本稿では無形文化財保護において、世代間の関係の中で十分に伝承の生成を取り扱うことができない学問的背景を明らかにし、現在の課題に対して心理学が有効な視座を持っていることを示す。具体的には、これまで伝承を中心に取り組んできた民俗学、そして民俗学と正統的周辺参加という概念を介して密接な関係を保っている心理学における問題を明らかにする。そして、心理学において発達を世代間の関係から捉えるモデルとして注目されている「生成的ライフサイクルモデル」を紹介し、無形文化財保護で懸案となっている伝承の生成に対して、有効な視点となりうることを論じる。

2. 民俗学と心理学のインターフェイスとしての正統的周辺参加

(1) 民俗学における「伝承」観とその批判

これまでの民俗学研究では「伝承」に関して実際に伝承を行っている伝承者から独立して捉えられるものとして考えられており、かつ、歴史的に変化することのないものを明らかにすることに力点が置かれていた。

近年、民俗学において芸能の伝承が大きなテーマになった問題として、1992年に制定された「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」（以下、「おまつり法」）がある。この法案は地域の伝統的な芸能を活用した行事を

通して「国民及び外国人観光客の観光の魅力の増進に資する」、「特定の地域商工業の活性化に資する」、「個性豊かな地域社会の実現」「国際相互理解の増進に寄与する」という四つの大きな目的があることが謳われている。換言すれば、おまつり法は地域の伝統的な芸能を一つの観光資源として捉え、地域経済の活性化に資するように法制度を整えようとしたものといえよう（岩本、1998；橋本、2000）。

この法案に対して、民俗学者は民俗芸能がショー化され墮落してしまう（小島、1992）といった主張や、民俗芸能の本質は芸能から来るものではなく、民俗という存在形態に基づくものであるのに対して、おまつり法はそのような存在形態自体を変化させてしまう（植木、2007）といった主張がなされた。俵木はおまつり法に関する民俗学者の意見をまとめた上で、「民俗芸能には何らかの本質が存在する」、「その本質は歴史的に不変のものであり、今後も変えてはならない」、「そうした「不変の本質」を見極めることは、民俗芸能研究者あるいは文化財保護に関わる行政官の仕事である」といった共通する認識が見られると主張する（俵木、1997）。このおまつり法に対する民俗学者からの意見や俵木のまとめから、民俗学においては伝承に関して普遍的で外部からその普遍性を評価可能なものとしてみなしていることが理解されよう（大石、1998）。

さらに、川田は伝承が減少したり、消滅したりするという議論自体、「民俗学者が採集しようとしていた伝承」、それこそ、「伝統的な」民俗学者の思い込みの対象としての「伝承」であり、そのような考え方を再考する必要があることを指摘する（川田、1993）。また、俵木はこれまで民俗学者が抱いてきた伝承観に関して、民俗芸能という無形の身体表現を超世代的に受け継がれてきた「もの」のように扱ってしまい、民俗芸能を伝承することに伴う困難・葛藤・試行錯誤・新たな意味の発見といったものは覆い隠されてしまっていると述べる（俵木、1997）。このようにおまつり法に関する民俗学者の意見や俵木や川田の主張に見て取れるように、これまでの民俗学では「伝承」について、伝承者から独立して捉えられるものとして認識しており、さらに、超世代的に「変化しないもの」を明らかにすることに研究上の焦点があたっていたと考えられるのである。

(2) 生成を捉えるモデルとしての正統的周辺参加

民俗学では、熟練を生成する社会学的文脈に明確かつ組織的に提示した正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation : 以下、LPP) という概念を用いて学習者の熟達化を明らかにすることで、伝承の生成的な側面を捉えてきた。しかし、LPP はあくまで学習者に焦点が当たっているため、伝承者が生成をどのように捉えているのかという点を明らかにするには十分なモデルとは言いえない。

近年、これまでの民俗学における「伝承」とは異なる視点から、新たに伝統を受け継ぐ当事者の視点を取り入れた生成的な伝承観を確立しようという動きが起こっている。例えば、伝承を過去・現在・未来という世代間の関係の中に伝統を受け継ぐ当事者自らを位置づけていく全人格的なプロセスとみなす考え (俵木、1997) や伝統を受け継ぐ当事者が社会と密接に交流を行い、その交流を通じて、自らを歴史の中に位置づけていく行為として伝承を定義する考え (小池、2002) などが現れている。そのような主張の中で、伝承において生成を取り入れるために、伝統を受け継ぐ当事者が熟達していくプロセスから伝承を再構築しようとする動きがある。(小林、1994; 上野、2001; 大石、2007)。ここで注目された概念が、心理学で学習や認知の文脈依存性を訴えた LPP という概念である。

心理学の一分野である認知研究では 1970 年代まで主として実験室的な状況の下で言語、論理、問題解決についての形式モデルを洗練させることに主眼が置かれていた (Quinn, 1982)。しかし、1970 年代後半以降から、そのような閉鎖的な状況での実験結果における生態学的妥当性を疑い、人間の生活における広範な状況の下で思考それ自体を問い直す試みが現れ始めた (Bronfenbrenner, 1979; Lave, 1988)。このような人間の認知や学習に関して状況や環境から切り離せないという議論の中で中心的な位置を占め、かつ、心理学的に理解されていた熟練を生成する社会学的文脈に明確かつ組織的に提示した概念が LPP である (福島、1993)。LPP とは学習主体の行為の変化 (熟達化) を「実践コミュニティ」に対する参加の軌跡の中で捉えることで、学習をコミュニティへのコミットメントの変化というマクロな視点から明らかにしようとするものである。

(Lave & Wenger, 1991)。LPP では「参加」という概念を学習の中心におくことを通して、学習を極めて社会的なものに転換することに成功しているといえよう (高木、1996; 福島、1995)。

民俗学ではこの LPP の枠組みを用いて、「伝承」を実践コミュニティ内における参加の軌跡として位置づける (小林、1994; 上野、2001)。例えば、小林は松戸市上本郷の獅子舞を対象として「獅子舞講中」と呼ばれる共同体を実践コミュニティとして見立て、そこでの学習者の熟達に至る参加のプロセスを追うことで、民俗学における伝承の生成を極めて明瞭に浮き立たせている (小林、1994)。このように LPP の中に「伝承」を位置づけることで、コミュニティ内において人やモノなどの多様なリソースを介した社会的な実践を通じて、学習者が生成的に伝統を受け継いでいくプロセスを捉えることができるのである。このように、LPP を通じて議論される「伝承の生成」は伝承を受け継ぐ学習者が十全的な参加者へと至る過程で変化していく「可変的なアイデンティティ」から見ることで、生成を捉えようとする (大石、2007)。つまり、「伝承の生成」を実践者のアイデンティティの変容プロセスから捉えることで、当事者の視点を取り入れた伝承観を打ちたてようとするものなのである。

しかし、Hanks は、『状況に埋め込まれた学習』のその序文において、LPP では親方となった人々による芸能の変容や変化といったテーマは扱うことが出来ないということを指摘している (Hanks, 1991)。そもそも、LPP では学習の初期状態として「周辺の参加 (peripheral participation)」を、そして、到達地点に「十全的な参加 (full participation)」という概念を置いているが、分析を行っている時間のスパンとしては初心者から熟達者へ至る軌跡を追っているに過ぎない。そのため、実践者が十全的な参加者となった後、つまり、当該のコミュニティにおいてアイデンティティが確立した後に弟子にどのように伝承を伝えるのかという点に関しては捉えることができないのである。すなわち、LPP に拠って立つ限り、自らが一人前となり親方となったあと、先行する世代から受けつぎ、自らが新たに生成させた伝承をどのように後続の世代に伝えるのかという世代間の関係性を射程に捉えることができないのである。

3. 発達心理学における次世代継承の問題点—Eriksonの生成継承性を中心に—

一方、発達心理学の中でも次世代継承は議論されているが、これまでの研究では世代間の関係から独立された基本的に「個人」が分析の対象とされており、数世代にわたって継承され、自分が受け継いだ経験を後継者に伝承するという世代の関係性、つまり、世代間の関係性が研究の主題として扱われてこなかったことが指摘されている。

1980年代以降、発達心理学はそれまで青年期どまりであった時間軸を生涯全体に伸ばし、衰退や多方向の発達を含む多次元なモデルが描かれることになった (Baltes, 1987; 小嶋, 1995; やまだ, 1995 等)。このように多様かつ、多次元的なモデルが描かれることになったが、実際には人は生涯を通して発達し続けるという進歩モデルの延長が提案されることが多かった (やまだ, 2000a)。つまり、生涯発達心理学は扱う時間軸の範囲を青年期から死 (あるいは老年期) まで拡大してきたが、それはあくまで世代間の関係から独立した「個」を中心にしたものであつたと言える。

このような生涯発達心理学の先駆的な理論でかつ、次世代継承を理論的視座に含んだ発達モデルに Erikson のライフサイクルモデルがある。Erikson は個人の行動や発達を理解するためには、そこに働いている生理学的過程、心理学的過程、社会・文化的文脈の不可分な関係を取り入れる必要があると主張し、自らのライフサイクル論の基礎とした。Erikson の発達モデルは八つの発達段階と発達課題が交差し合う織物モデルであり、特に、対角線は発達段階の危機を表す。また、このモデルは進化論の影響を強く受けており、乳児期はすべての基礎として見られ、その上に各時期が築かれていき、老年期が最終的な統合の完成体であると位置づけられる進歩モデルでもある。

Erikson のモデルにおいて次世代継承が論じられているのは、成人期である。特にこの時期の発達課題である生成継承性 (generativity) に関して近年の研究では注目が集まっている。生成継承性とは「主に次の世代を導いたり、育てたりすることに対する関心」 (Erikson, 1963: pp.267) と定義されるもので、Erikson の発達段階モデルにおいては停滞と対立する概念である。生成継承性に関してはその定義の多義性などから

ライフサイクルモデルの研究において当初十分に研究されることがなかった (Vaillant, 1995) が、Kotre などによる生成継承性概念の理論的な深化により、1990 年代から研究が盛んになってきた (McAdams, 2001; McAdams & Logan, 2004)。

例えば、McAdams は生成継承性の全体像を理論化することを試み、生成継承性の概念モデルを提示した (MacAdams & St Aubin, 1992; MacAdams et al, 1998)。このモデルは、内的欲求や文化的欲求など七つの生成継承性の構成要素が、どのように次世代のために、また自己完結のために関心を持ち行動をとるのか、それぞれの概念構成の要素の位置づけと相互の関連性を示している。このような MacAdams の議論は生成継承性を計量可能な構成要素に分解することで、個人の生成継承性に関する特性を明らかにすることに成功している。

しかし、上記のような研究は従来の Erikson のライフサイクルモデルに則っているため、生成継承性という概念であっても、世代から独立した「個」を対象としたライフサイクルの中に位置づけられてしまう (Yamada, 2003)。つまり、例え後続世代への関係性に関する議論であっても、Erikson のライフサイクルモデルに則る限り、世代から独立した「個」の発達においていかなる位置づけを持つのかという点に議論が収斂してしまうのである。

4. 世代間の関係性を捉えるモデルとしての生成的ライフサイクルモデル

(1) 生成的ライフサイクルモデルの理論

一方、発達心理学において、これまでの発達の考え方自体が先行する世代や後続する世代と独立した「個」として捉えられているという批判が起こってきている。

これまでの発達研究では世代から独立した個の成長に焦点を当て、誕生から死までという時間軸で捉えていたため、個が死んだ後のことや個と次の世代の関係などは、扱われないか、扱われたとしても宗教などの関連で捉えられていた (小嶋, 2000) このような視点を取っている限り、誕生以前に長きにわたって継承されてきた智慧や態度、文化を自身がどのように受け継ぎ、どのように後続世代に伝えようとしているのかという世代間の関係性に関しては十分に扱うことがで

きない。

このような批判なども受けつつ、やまだは Erikson の生成継承性を東洋の循環思想に組み込んだ、人生を連続する世代の中の一部と捉えるライフサイクルモデルである生成的ライフサイクルモデル (Yamada, 2002; Yamada, 2004; Yamada & Kato, 2006) を提示した。

やまだの研究ではイメージ画法と呼ばれる手法 (やまだ, 1988) を用いて、フランスや日本などの大学生を対象に自らの「人生のイメージ地図」を紙に描かせ、同時に絵についての説明も同じ紙に書くように求めた。このイメージ画を分析する中で、自らの人生を先行世代と後続世代に埋め込まれた存在として描く絵が文化に関わらず存在することを見出し、そこから生成的ライフサイクルモデルを作り上げていく (Yamada, 2002)。

このような「イメージ画」という当事者の意味づけから捉えられた生成的ライフサイクルモデルはこれまでの発達心理学が「誕生から死」という時間の幅を扱っていたのと異なり、誕生前や死後の出来事を扱うことも可能とする。このような時間概念の変更は、単に生涯という時間がより長くなったという量的な変化だけを意味するのではない。もし、時間の幅を広げただけで、発達の到着地点に「あの世」を措定するのであれば、時間軸における終点を「死」から「あの世」にずらしたに過ぎず、依然として世代から独立した「個」という呪縛から逃れられていないものとなろう。

やまだの研究の眼目は死後や誕生前といった時間軸に Erikson の生成継承性を導入することで「あの世」の議論に落とし込むのではなく、「世代」の議論に置き換えるところにある。生成継承性は先に論じたように、後続世代に対する関心を表すものであるが、一方で、これまでは世代から独立した「個」の発達の中で議論されてきた。しかし、この生成継承性という概念を世代と世代を結ぶものとして生成的ライフサイクルモデルの中核に据えることで、誕生前や死後を世代と世代の関係性の議論にシフトさせると同時に、個の発達の中での「次世代継承」という位置づけから、自らがこれまで発達してきた中で築き上げたものを後続世代に伝える関心という世代間の関係性の議論へと生成継承性自体の概念的変更を行っている。

ここで注意が必要なのは生成的ライフサイクルモデルでは世代と世代の関係性をあくまで当事者の意味づ

けから捉えるという点にある。やまだの研究がイメージ画と呼ばれる当事者の意味づけを捉える手法を使っていることからこの点は理解されよう。従って、当事者がどのように世代と世代をつないでいるのか、あるいは、どのような歴史的な文脈の中に位置づけられているのかというのは当事者の意味づけから明らかにされる必要がある。

このように個を世代と世代の関係の中に埋め込まれた存在として措定することで、誕生から死までを扱う「個人のライフサイクル」から、世代と世代の関係性に埋め込まれた「ライフサイクルの中の個人」へと視点をずらし、共同体の歴史的な文脈における個人の位置づけを明らかにするモデルを提供するのである。

(2) 世代間の関係性という時間軸—ナラティブ・アプローチの可能性—

それでは、生成的ライフサイクルモデルではどのように個人の世代間の関係性に関する意味づけを明らかにするのであろうか。このような当事者の意味づけを明らかにする方法の中で、近年最も注目すべき手法の一つに、物語というルートメタファーを用いて、個人の経験を捉えようとするナラティブ・アプローチがある (Bruner, 1990; Josseleson, 1993; Polkinghorn, 1988; Sarbin, 1986)。

ナラティブ・アプローチでは命題の「真偽」を明らかにする論理実証的な研究とは異なり、人が人生にどのような意味づけを与えているのかという「意味の行為」「経験の組織化」に迫ろうとする (Bruner, 1990; やまだ, 2000b)。やまだは物語 (narrative) を「二つ以上の出来事 (event) を結び付けて筋立てる行為」として定義し (やまだ, 2000b)、その二つ (あるいはそれ以上の) の出来事を対象者がどのように「むすぶ」かで、生成される意味が大きく異なってくると述べている (やまだ, 2007)。従って、ナラティブ・アプローチでは研究者の問題関心に従って、対象者がどのように自らの経験をむすんでいるのか、つまり、組織化しているのかということを明らかにすることに力点が置かれることになるのである。

ナラティブ・アプローチでは主として当事者のライフストーリーを分析することでどのように経験をむすんでいるのかということを明らかにする。ライフスト

ーリーを分析するという手法を用いるのは、本人のものの見方や意味づけを明らかにする方法として本人の語りから構成されたライフストーリーの分析が有効（やまだ、2000b）だからである。ライフストーリーでは「歴史的眞実」に関心を持つライフヒストリーとは異なり、「語られた眞実」により関心を持ち（Mann, 1992）、どのように人生経験が構成されているのか、どのように意味づけられているのか、どのような語りがなされているかということなどが中心に分析される（やまだ、2005）。

このように「語られた眞実」に焦点を当てるのがライフストーリー研究の特徴であるため、当事者の意味づけが自らの人生の過去と現在の自分をどのように結んでいるのかということだけでなく、未来の自己や可能性としての自己、あるいは既にいなくなってしまった人との関係など可能世界や想定世界を語りの中に取り入れ、分析することを可能とする（やまだ、2000a）。

このように多様な時間軸を扱うことのできる一方で、これまでの「語り」を扱った研究では、「語り手」と「聞き手」の二者関係を取り扱う研究が大勢を占めていたことが指摘されている（やまだ・山田、2009）。この「語り手」－「聞き手」の関係は、研究において「クライアント」－「カウンセラー」という関係も指すことがあるが、いずれにしても、このようなモデルでは喪失体験や転機の経験など語り手が自らの人生の中でどのように当該の経験を意味づけているのかというプライベートな経験に焦点が当たることになる。

このような二者関係に焦点を当てる研究が趨勢を強めている一方、近年、語り手を他者と他者をつなぐ「媒介者（mediator）」として捉え、語り手－媒介者－聞き手といった三者関係を取り扱う必要性に関して言及されてきた（やまだ、2008；やまだ・山田、2009）。例えば、菅野他（2009）は戦争体験や水俣病の経験などの語り継ぎを事例として、自らが当事者として経験していない出来事に関して、語り継ぐ人々が当事者から聞いた話や当時の資料などを基に、自らの文脈に意味づけ、次の世代に伝えている様子が明らかとなっている。このように当事者として経験をしていない人々が次の世代にその経験を伝えようとするとき、語り継ぐ人々は当事者として経験した「語り手」と「聞き手」を結ぶ媒介者として位置づけられるのである。

この三者の関係を取り扱うことで、二者の関係では見出すことができなかったパブリックな経験に焦点を当てることが可能になる。三者関係であれば、個人の発達の中での意味づけは先行世代からどのような影響があったのか、また、その意味づけをどのように後続世代に伝えたいのかというように、プライベートな個人の意味づけを世代と世代を結ぶ、インターローカルなものに昇華する必要が出てくる。つまり、二者関係から三者関係にナラティブに関する研究がシフトすることで伝承などにおけるパブリックな経験の伝達が扱えるようになるのである。

三者関係を扱うことは生成的ライフサイクルモデルを捉える上でも非常に重要な視点を提供する。生成的ライフサイクルモデルでは世代と世代に埋め込まれた存在として個人を捉える。つまり先行世代と後続世代を媒介する伝承者という三者関係を扱うため、二者関係を扱うこれまでの語り研究では十分に当事者の経験を取り扱うことができないのである。

5. 終わりに―無形文化財保護の新たな可能性―

最後にここまでの議論をまとめつつ、今後の無形文化財保護に向けてどのような研究が必要となってくるかを指摘する。

本稿では無形文化財保護においてこれまで世代間の関係における伝承の「生成」が取り扱うことができなかった理由に関して、伝承を中心に扱ってきた民俗学や民俗学と密接な関係を有する LPP、そして発達心理学で次世代継承を扱う Erikson のライフサイクルモデルを中心に問題を見てきた。その結果、民俗学においても、そして心理学においても世代間の関係性を明らかにする射程を有していないことが明らかとなった。また、このような限界に対してやまだの提唱する生成的ライフサイクルモデルは正に無形文化財保護の議論に有効な視座を与えるものであり、同時にこのモデルを支えるナラティブ・アプローチにおいても世代間の関係性を捉える必要性が高まっていることが示されたといえよう

今後の課題としては、身体的な動作を語りの議論にどのように落とし込んでいくのかということが挙げられよう。伝統的に伝わる舞や技術、音楽などは言葉だけで伝えられるものではない。むしろ、伝統芸能の伝

承は明確な言語的な指導はあまりなく、後続者の模倣によって伝わると考えられてきた(生田,1987)。このような本来、言語化されていない身体的な動作から師匠の意味づけをどのように明らかにするのかということは無形文化財保護において、あるいは、伝承の議論それ自体において非常に本質的な問いとなろう。

この点に関しては先駆的な研究が生まれてくる。例えば、竹内らは伝承の場におけるフィールドワークを通じて、師匠の指導から「伝えようとしているもの」を明らかにし、さらに、そのような「伝えようとしているもの」に関して世代間の関係性を問うインタビューを行うことで身体動作に伴う伝承者の意味づけを引き出すことに成功している(竹内・渡部,2008)。

このような研究の成果を踏まえつつ、身体動作と語りを結びつけ、無形文化財保護へ向けた新たな土台を作成してことが今後求められてこよう。

参考文献

- Baltes, P. B. (1987) "Theoretical proposition of life-span development psychology: On the dynamics between growth and decline". *Developmental Psychology*, 23, pp.611-626
- Bronfenbrenner, Martin. (1979) *The ecology of human development: experiments by nature and design*. Harvard University Press
- Erikson, Eric. H. (1963) *Childhood and society* (2nd ed.). New York: Norton
- 福島真人 (1993) 「解説：認知という実践—「状況的学習」への正統的で周辺的なコメント—」J. レイヴ & E. ウェンガー (佐伯胖訳) 『状況に埋め込まれた学習』 pp.123-165、産業図書
- 福島真人 (1995) 「序文—身体を社会的に構築する—」福島真人編 『身体構築学』 pp.1-66、ひつじ書房
- Hanks, William F (1991) Foreword. *Situated learning: Legitimate peripheral participation* pp.13-24. New York: Cambridge University Press
- 俵木悟 (1997) 「民俗芸能の実践と文化財保護政策—備中神楽の事例から—」『民俗芸能研究』 25, pp.42-63
- 俵木悟 (2006) 「民俗芸能の変化についての一考察」東京文化財研究所編 『民俗芸能の上演目的や上演場所に関する調査研究報告書』 pp.15-33
- 橋本裕之 (2000) 「伝承母体の変質—現代社会における民俗—」香月洋一郎、赤田光男編『講座 日本の民俗学 10 民俗研究の課題』 pp.69-80、雄山閣出版
- 生田久美子 (1987) 「「わざ」から知る」東京大学出版会
- 菅野幸恵・北上田源・実川悠太・伊藤哲司・やまだようこ (2009) 「過去の出来事を“語り継ぐ”ということ」『質的心理学研究』 8, pp.6-24
- 川田順造 (1993) 「なぜわれわれは「伝承」を問題にするのか」『日本民俗学』 193, pp.15-21
- 小林康正 (1994) 「伝承論の革新」『松戸市立博物館調査報告書』 1, pp.159-172
- 小池淳一 (2002) 「伝承」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学—野の学問のためのレッスン 25—』 pp.52-62、せりか書房
- 小嶋秀夫 (1995) 「生涯発達心理学の成立と現状」無藤隆、やまだようこ編『生涯発達心理学とは何か—理論と方法—』 pp.11-35、金子書房
- 小嶋秀夫 (2000) 「人間発達と発達研究が位置している状況」小嶋秀夫他編『人間発達と心理学』 pp.3-34、金子書房
- 小島美子 (1992) 「民俗芸能が観光の材料にされる!!」『芸能』 3、pp.33-34
- Josseleson, Ruthellen. (1993) A narrative introduction. In Josseleson, Ruthellen. & Liebich, Amia.(Ed) *The narrative study of lives: Vol.1*. pp.iv-xv. California: SAGE Publications, Inc
- Lave, Jean. (1988) *Cognition in practice: Mind, mathematics and culture in everyday life* Cambridge University Press
- Lave, Jean, & Wenger, Etienne. (1991) *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press
- McAdams, Dan. P. (2001) Generativity in Midlife. In Lachman Margie. E. (Ed) *Handbook of midlife development*. pp.395-443 : John Wiley & Sons, Inc
- MacAdams, Dan. P. & de. St. Aubin, Ed. (1992) "A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative theme in autobiography". *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, pp.1003-1015

- McAdams, Dan. P., Hart, Holly. M., & Maruna, Shadd (1998) "The anatomy of generativity". In MacAdams, Dan. P. & de. St. Aubin, (Eds). *Generativity and adult development*. American Psychological Association
- McAdams D.P., & Logan R.L. (2004) What is generativity? In de St Aubin, E., McAdams, D.P., & Kim, Tae-Chang. (Ed) *The generative society - Caring for future generation*. pp.15-31. American Psychological Association
- Mann, Sarah J. (1992) "Telling a life story: Issue for research". *Management Education*, 23(3), pp.271-280
- 大石泰夫 (1998) 「民俗芸能と民俗芸能研究」『日本民俗学』213、 pp.82-97
- 大石泰夫 (2007) 「芸能の<伝承現場>論—若者たちの民俗学的学びの共同体—」ひつじ書房
- Polkinghorn, Donald. E. (1988) *Narrative knowing and the human sciences*. New York. State University of New York University
- Quinn, Naomi (1982) "'Commitment' in American marriage: A cultural analysis". *American Ethnologist*. 5(2). pp.206-226
- 高木光太郎 (1996) 「実践の認知的所産」波多野誼余夫編「認知心理学 5 学習と発達」pp.37 -58、東京大学出版会
- 竹内一真・渡部信一 (2008) 「民俗芸能の師匠に対するナラティブ・アプローチを用いた伝承の分析—無形文化財保護に向けて—」『質的心理学会第五回大会論文集』pp.82.
- 齊藤裕嗣 (2004) 「民俗芸能等に対する行政的支援について—文化庁の支援策を中心に—」『年刊芸能』10、pp.50-59
- Sarbin, Theodore. R.,(1986)"The narratives as a root metaphor for psychology". In Sarbin, Theodore. R.(Ed) *Narrative psychology: the storied nature of human conduct*. pp.3-21. New York: Praeger
- 植木行宣 (2005) 「世界の無形文化遺産の保護制度のこれから」『月刊文化財』497、pp.14-16
- 植木行宣 (2007) 「文化財と民俗研究」鹿谷勲・長谷川嘉和・樋口昭『民俗文化財—保護行政の現場から—』pp.30-47、岩田書院
- 上野誠 (2001) 『芸能伝承の民俗誌的研究』世界思想社
- Vaillant, George. E. (1995) *The wisdom of the ego*, Harvard University Press
- やまだようこ (1988) 「私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理—」有斐閣
- やまだようこ (1995) 「生涯発達をとらえるモデル」無藤隆、やまだようこ編『生涯発達心理学とは何か—理論と方法—』pp.57-92、金子書房
- やまだようこ (2000a) 「日本文化の生命循環と生涯発達観」小島秀夫他編『人間発達と心理学』pp.106-115、金子書房
- やまだようこ (2000b) 「人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学—」やまだようこ編『人生を物語る—生成のライフストーリー—』pp.1-38、ミネルヴァ書房
- Yamada, Yoko (2002) "Models of Life-span Developmental Psychology: A Construction of the Generative Life Cycle Model Including the Concept of "Death". *京都大学教育学研究科紀要*, 48, pp.39-62
- Yamada, Yoko (2004) "The Generative Life Cycle Model: Integration of Japanese Folk Images and Generativity." In de St Aubin, Dan P. McAdams, Tae-Chang Kim (Ed) *The generative society: caring for future generations*, pp.97-112, Washington, DC: American Psychological Association
- やまだようこ (2005) 「ライフストーリー研究」秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー』pp.191-212、東京大学出版会
- やまだようこ (2007) 「ナラティブ研究」やまだようこ編『質的心理学の方法』pp.54-71、新曜社
- やまだようこ・山田千積 (2009) 「対話的場所(トポス)モデル——多様な場所と時間を結ぶクロノトポス・モデル」『質的心理学研究』8、pp.25-42
- Yamada, Yoko. & Kato, Yoshinobu. (2006) "Images of Circular Time and Spiral Repetition: The Generative Life Cycle Model." *Culture & Psychology*, 12(2), pp.143-160
- 吉田憲司 (2005) 「有形・無形文化遺産とミュージアム—ユネスコにおける無形文化遺産保護条約採択を機に—」『民博通信』108、pp.2-3

(修士課程)